

吐き出す息は茜色。見渡す限りは紅の海。

両手には抱え切れない紅の葉。

腕をすり抜け、紅の葉は宙を舞い、少年の足元へ一枚一枚降り積もって行く。

それらは夏に浮かぶ夕焼けよりも美しく、鮮烈で、目が覚める程に瞼の奥を燻らせる。

正臣は届けようとしている。両手一杯の紅の葉を。

綺麗なものが見たいと言ったあの人に、世界で一番綺麗なものを見せて欲しいと口にした、あの人に、正臣はそれを届けなければならぬ。

十に満たない正臣が知る、世界で一番綺麗なもの。それを両手に精一杯に抱え、正臣は息を切らせて走っている。

これが世界で一番綺麗なものは何か。それはこれだと、胸を張って言うことができる。

きつと十年後も、二十年後も、同じ事が言える筈だと正臣は心から信じている。一度はあの人から逃げてしまったが、けれどもまだ間に合うはずだ。ぐずぐずした分、走らなければならぬ。

これを見れば、きつとあの人にも喜んでくれるはずだ。それほど、この紅は美しい。早く見せたいと心から願う。

今の正臣には靴の底が擦れる感触すらも、もどかしい。踏みつける落ち葉の乾いた音は耳に心地良いが、今は走るべきだと思う。

ちらほらと落ち葉の流れる小川を越えて、信号の点滅する横断歩道を駆け抜けて。路地を曲がり、丘を見上げ、フェンスをくぐり抜けた先の坂道を駆け登る。

「……晴海ねえ」

あの人の名前が、思わず口から漏れ出す。

息が上がる、胸が高鳴る。頬が熱くなる。それでも止まらない。

止まるものかと、しゃにむに走る。見せるのだ、少しでも早くと走り続ける。

息が苦しい、脚が痛い、この脚はそんな理由では止まらない。逃げた分は、この痛みで贖うのだとばかりに、彼は走り続ける。早く届けよう、紅の葉を。

世界で一番綺麗な、この紅の葉を。

——ここらの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

法月正臣（ほうづきまさのり）は大学生活をそれなりに満喫していた。長らく一人きりで送らざるを得なかった高校生活に別れを告げて、とうとうしがらみの存在しない新しい世界へ旅立つことに成功したからである。

家の経済事情から、正臣の選択できる大学はいくつかしかなかった。親戚の居る四国にある大学から下宿して通学するか、もしくは自宅から通学できる範囲にある大学に入るか、である。

条件に伴う大学はいくつかあり、すったもんだの末に正臣は自宅から通える大学へ進学した。同じ高校から進学した人間も何人かいる大学だったが、学科や学部が違う為に大学内で出会うことは最早殆どない。

正臣はしがらみから解放されたのだ。

中学二年の後半、親の仕事の都合で東京から関西のこちらに引っ越してきてからというものの、正臣には確な人生が待っていなかった。

転校前まではそれなりに友人が居たものの、関西独特の風土や人間関係をつかみ損ね、友人関係の構築に失敗して孤独な生活を余儀なくされたのである。更に最悪だったのは、転校先の私立のエスカレーターに乗ってしまったことである。

高校受験をしないで良いという誘惑に勝つことができず、そのまま上に上がってしま

って、再度高校生活での人間関係の構築に失敗。いわゆる「ぼっち」のまま三年間過ごしたのである。

大体自分が悪いのは百も承知の上ではあるが、だからと言って現状を甘んじて受けることにストレスが全くないわけではない。高校生活を忍んで耐えきれば、大学生活で転機が訪れる。それだけを心の支えに高校生活を乗り切ったのである。

大学生になってからは、以前に夢見たように……とまではいかないものの。それなりに充実した毎日を過ごすことができています。大学の中は、他の地方からやってくる人々も多く、関西人でなくともそれなりに友達を作ることのできるからだ。

以前まではからつきしゼロであった、SNSの登録もそれなりに増え、昼食をトイレにこもって食べる必要もなく、無事に興味のあったサークルにも入会して毎日それなりに楽しくやっている。

閑話休題。

ほぼ順風満帆とも言えるこの滑り出しは、正臣の人生史上最高とも言える戦果だ。後は友達の輪とやらを広げて、いわゆる「リア充」生活を満喫するのみである。

しかし、現在正臣の顔は少しばかり暗くなっている。手にしているSNSの画面に友人の一人から写真付きでショートメールが入ったからだ。その内容曰く……「お前の妹って教会通ってんの？ 真面目だね」というものであった。

「どうしたんだよ兄貴。馬鹿なこと呟いて炎上でもしたのか？」

現在正臣が座っているのは自宅のソファの上である。隣には弟の祐介が寝っ転がってどら焼きをくっている。コンビニで、百円で売っているでっかいやつだ。半分よこせといったらすげなく断られ、文句を言おうとしたところで件のショートメールが入ったのである。

呟くとはクイツカーのことだ。クイツカーとは、二百文字足らずで自分の意見をネットの中に公開できる、ソーシャルネットサービスである。大勢の人間が参加しているが、妙な発言をすると、それを持ち上げてインターネット上で攻撃なども行われたりもするので、使用には細心の注意を要する。……のだが、ものぐさな正臣は三日もたたずにやめてしまっているの、そもそも参加していない。

「いやいや、俺はクイツカーなんてやらないよ」

「じゃあなんだよ」

表情を強張らせている兄の顔を見ながら、祐介は怪訝そうな顔で声をあげた。根暗な兄がスマホを眺めて表情を変える光景など既に見慣れているが、今回ばかりはどうも雲行きが怪しいことを察したのである。

「ちよっとこれを見てくれ。こいつをどう思う？」

リアルでネットスラングなんて使うなど正臣をジト目で見つめながら、祐介は正臣のスマートホンの画面を覗き込んだ。そして次の瞬間「おおう」と声を上げる。

写真の中には、どこかの教会……のような建物から出てくる妹の様子だった。部分的

な写真だが、後ろに十字架のマークが見えるので多分教会なのだろう。

「へえ、あいつ最近、日曜日になると家から居なくなると思ってた。こんなところに行ってるのね。確かにここ一年ぐらい、なんか様子が可笑しかったものな」

祐介が納得顔でそういうと、確かに正臣も妹の最近の様子や言動の変化に気が付いた。その一、食事中に醤油や小皿を取ってくれるようになった。その二、自分のことを「お兄ちゃん」と呼ぶようになった。その三、家の中の言動が随分柔らかくなった。

「良いことじゃないの？ あいつ顔合わせる度に兄貴のこと白豚呼ばわりだったじゃん」
つらつらと違和感を列挙する正臣に、祐介はあつけらかんと答える。いや、駄目だろ、とそんな弟にすかさず正臣が突っ込んだ。

「妹が宗教に嵌ってるのか嫌すぎるんですけど？」

「キリスト教は別に変な宗教じゃないだろ。新興宗教に嵌ったわけでもあるまいし。金巻き上げられてるならともかく、アレが品行方正になってるんだから問題ないだろ」

「俺が嫌なんだよ。既に俺の友達にばれてんのよ？ このまま情報が拡散したらどうすんのよ。俺まで宗教野郎扱いされて瞬く間に友達が居なくなるだろうが」

「ネットの見すぎだろ。俺のダチにも何人かいるけど、別にハブにはされてないぜ？」
馬鹿じゃねえの？ とでも言いたげな表情で自分のほうを見上げる祐介に、正臣は頭を抱えて首を横に振る。

「いいや、だめだね。俺の大学生活、リア充生活がかかってるんだ。とにかく証拠を押

さえて辞めさせないと」

「兄貴、教会のこと嫌いなんだな」

「嫌いだね」

「巨乳シスター物のエロ本を五冊も持つてるのに？」

「うるさいよ！」

にやにやと笑いながら、祐介は肩をすくめて見せる。

「大体、単になんかの用事で出入りしてるだけかもしれないし、早とちりしてまた罵られてもしらないぜ。白豚おにいちゃん？」

「白豚っていうなよ！」

白豚とは、一時期妹に呼ばれていた呼び名である。ストレスでやけ食いして太っていた時期があるためだが、ダイエットに成功した後も妹に随分長い時間呼ばれ続けていた。

「とにかく、本当に出入りしてるかどうか確かめるから。お前も次の日曜日に付き合え

よ？ 祐介」

「は？ 嫌だよ。次の日曜日はダチと古着屋行くんだよ。夏物そろえるんだから」

「付き合ってくれよ。一人で宗教偵察とか怖いんだよ」

「……時給七百八十円」

舌打ちしてしばらく考えた後、仏頂面で右手を差し出す弟に、相変わらずがめついやつだと正臣はため息をついた。

法月祐介（ほうづきゆうすけ）は守銭奴である。貯金が趣味で常に財テクの勉強に余念がない。インターネット方面の取引にも随分熱心で、特に最近はおークション関連での小遣い稼ぎに熱中している。TOGと呼ばれているカードゲームのカードを転売するのだ。引退する人間からブロックでデッキを買い取り、そこから目ぼしいものを見出して適性価格よりやや高めの値段で転売するのである。

「そんなもん売れるのか？」と呆れながら後ろから見ている正臣だが、どういう訳か祐介は月に一万円程度の利益を上げ続けている。そろそろ粗利が十万に届くそうだ。正臣も真似してやろうかと思ったが、そのノウハウが細かく入り組みすぎているので、商売を始める以前の段階で挫折してしまった。

こんな感じで、祐介は同じ親から生まれたとは思えないぐらいに細かい計算が得意な奴である。どうしてこいつが自分の弟なのか、時折納得できない。

高校からして、兄の正臣がそのまま進学して失敗するのを見るや否や、併願に切り替えてさっさと別の高校に行ってしまった。正臣とは違い実に素晴らしい高校生活を満喫しているようだ。その証拠に休日はいつも友達とどこかに出かけに行くし、このまえちらっと見たらラインの登録数が百を超えていた。実によくできた弟である。

弟を見てみると、自分の中学生生活、高校生活が灰色だったのが、決して境遇のせいだけではなかったことを思い知らされる。祐介曰く、「俺が成功してるのは兄貴が失敗してくれてるお陰」だそうだが、どこまで本音か分からない。

祐介は何事にも偏見を持たず、常に公平に物を見るので人望がある。人の言葉にすぐ影響される正臣とは大違いである。人望もあるし、運動神経も抜群なので、友達も大勢いるようだ。正直言つて羨ましい。しかし、どうあがいても正臣には弟のような生き方を真似することはできない。持つて生まれた性分というものがあるからだ。

そんな、兄としても自慢の弟である祐介であるが、もし欠点があるとすれば、それは守銭奴なことである。

基本的に付き合いはいいが、少しでも嫌なことがあるとすぐに金を要求してくる。今回のように偵察に付き合いさえといえ、時給七百八十円が請求されるわけだ。

しかし、金さえ払えば野球部の助っ人でもなんでも引き受けるので、その点に関してはわりと評判が良いようだ。

正臣は、弟の要求額に対して、値切ることをせず、いつも言い値で応答している。弟が守銭奴になった責任の一端……いや、全責任は自分にあるからだ。

「クレインゲームって一回百円なんだよな」

きっかけになったのは小学校三年生の時であった。今から十年近く前の出来事である。

ゲームセンターの前で正臣はクレイニングゲームと睨みあつて、何かを考えていた。注目しているのは、クレイニングゲーム一回百円、六回五百円という文字である。

小学生の浅知恵で、正臣は五百円を入れて一回だけやつておつりボタンを押したら、そのまま五百円が帰ってくるのではないかと考えた。それを繰り返せばクレイニングゲームが何回も無料でできるのではないかと。

あまりにも馬鹿馬鹿しい考えではあるが、当時の正臣にはそれが名案であるかのように思われた。この素晴らしい名案を是非とも試してみたかったが、正臣の財布の中には三百円しか入っていない。その時に正臣は気づいたのだ。隣の祐介が五百円を持っているということに。

その日、祐介は小学校二年生に上がったばかりで、生まれて初めてお小遣いをもらったことを、正臣は知っていたのだ。初めて親からもらったきらきらの五百円玉は、当時の祐介にとってはさぞかし美しい宝物に見えたことだろう。

その五百円を、正臣は無残に巻き上げたのである。いや、自身の名誉のために弁解するならば、確かに五百円玉はそのまま返すつもりだったである。

正臣は自分のアイデアが試せるかどうかを実験したかっただけで、弟の五百円が欲しかったわけではなかったのだから。

祐介は正臣の素晴らしいアイデアを聞いて、目を輝かせて五百円玉を差し出した。尊敬する兄の名案ならば、きっとその通りになるだろうと信じたのである。

そして、祐介の輝く五百円はあえなくクレイゲームの中に飲み込まれたのである。

この瞬間、祐介は生まれて初めて詐欺により全財産を失うという災難を体験した。その瞬間から祐介のお金への執着は非常に強くなったのである。

もちろん五百円は謝罪と共に後日返却されたがもう遅い。齢七歳にして金銭を喪失する痛みを知った弟は、昔の弟には戻らなかった。以後、正臣は事あるごとに弟におごつたり、金銭面での要求には逆らつたりしなくなつたのである。

「兄貴、そろそろ三時間になるぜ。そろそろ帰らないと財布パンクするんじゃないの？」
「大学生の経済力を舐めるなよ？」

高坊とは違うのだよ高坊とは、などと言いながら、公園のシーソーに座つて正臣は教会の方を眺めている。自宅から徒歩十分ほどのところに、その教会はあつた。

「しかし、こんなところに教会があるなんてしらなかつたね。言われてみれば確かに教会の形してるわ、この建物」

妹の法月司（ほうづきつかさ）を追いかけて、日曜日の午前九時過ぎに正臣と祐介は出発した。妹は尾行されているなどは夢にも思わないのか、まったりと歩いて、当たり前のように教会の中に入つていった。

教会の外観は真っ白だ。三階建てで、青い屋根。屋根の上に申し訳程度に十字架が立つており、垂水喜望教会とか書かれている。

「あれって希望の誤字なのかね？」

「いや、知らねえよ。なんだよ。何が悲しくて、俺ら、日曜の午前中から兄弟で仲良くシーソーをぎこぎこやってるわけ？」

時給七百八十円を頂いているとはいえ、祐介は兄の理不尽な仕打ちに不満たらたらだ。

「高校二年にもなつて、何故リストラされたのを妻に言い出せないサラリーマンよろしく、公園で時間を潰すような真似をせねばならんのだ」と言わんばかりである。

「しかたないだろ、入っていったきり出てこないんだから」

「そりやそうだろ、出てくるっていったって午後過ぎだぞ」

「なんでそんなことが判るんだよ」

「だって表の看板に書いてあるから」

え、と声をあげて正臣が看板をみれば、確かに礼拝は午前十時〜十二時までとはつきり書かれている。その横には、教会学校が午前九時〜九時四十五分、水曜日に聖書研究祈禱会が夜からあるなど、案内が丁寧に書いてあった。

「教会学校とやらが九時四十五分まで。礼拝前にやってるんだらうよ。十時前にガキがわらわら出てきただろ。人が出入りしてたのもそのあたり。そこからぱったり人が出なくなつたから、もう十二時過ぎるまで人は出てこないだろうぜ」

「そんなのわかんねえだろ。途中で飽きて出てくるかもしれないじゃねえか」

「飽きて出てくるようなところに毎週でかけるかよ。俺らは九時過ぎにアレが教会に入

るのを確認したら、家にもどって昼過ぎまでごろごろしとけばよかったのさ。こんな公園で悲しくシーソーし続けるなんてこともしないで済んだんだよ」

「もつと早く言えよ」

「言おうとしたら遮ったんだろ。ちゃんと時給はもらうからな」

くそう、と声を上げて弟をジト目で見つめた後、ちゃんと払ってやるから安心しろと返事をして公園の時計を見る。時刻は十二時過ぎ、そろそろ出てくる時間である。

「大体さ兄貴、アレだってもう中学三年なんだけ。品行方正になってくれた方が夜遊びするよりよっぽどまだよ。受験勉強だつてちったあ真面目にやるだろ？　なんでそんなにこだわるんだよ。自分で行きたいつて言ってるなら行かしてやりや良いじゃないか」

「いいや、だめだ。キリスト教つてのは歴史上で虐殺しかしてないキ○ガイ宗教だぞ。そんなのに嵌ったら何しだすか分からないだろ。表向きは品行方正でも、きつと裏じゃ意味も解らないことを企んでるに違いないんだ」

「……つて、ネットに書いてあったのね」

明らかに馬鹿にしたような目でこちらを見る祐介に返す言葉もなく、正臣はぐぬぬ、と声を詰める。

「まあ、聞け。祐介。大体キリスト教の神っていうのはとんでもないやつなんだぞ。なんと悪魔より神の方が人間を殺してる数が多いんだからな」

「そんなの当たり前だろ。さては兄貴何にもしらねえな？　神と悪魔っていうのは敵対

勢力じゃないんだぜ？」

正臣の放った伝家の宝刀を、祐介は当たり前のようになして言葉を返す。

「……は？ 何言ってるんだよ。神と悪魔は敵だろ。結託でもしてるってのか？」

「いいか、聞け、兄貴。神と悪魔ってのは、水戸黄門と悪代官の関係なのさ。悪代官は水戸黄門を蹴散らそうと悪いことをする。でもやれる範囲には限界がある。悪魔は神が許さなければ人に危害を加える権利を与えられてないのさ。その証拠にヨブ記じゃ、悪魔がわざわざヨブを攻撃するのに神から許可をもらおう場面が存在する。神は一部条件付きでそれを許可する。そんでもって悪魔はそれを守るんだ。いくら悪魔に力があるうが、印籠つきつけられたら悪代官よろしく土下座するしかないのさ。敵国同士で好き放題戦争やってるような関係じゃねえんだよ」

「なんでお前そんなに詳しいんだよ」

「そんなの俺が牧師に直接質問したからに決まってるだろ。俺が通ってる高校がミッシェンスクールだって忘れたのか？ Hi:Ba って知らないか？」

「はいびーえー？」

「ああいう教会に行ってる高校生連中がつるんでる団体だよ。誘われるから付き合いで何度か参加してるんだ。そこには現役の牧師も何人も出張ってくる。そこで俺が一つ、困りそうな質問をぶちかましてやったって訳よ」

確かに、言われてみればギターケースしよって、夏に一週間ぐらい居なくなるのを見

たことがある。どうせ友達同士でリア充体験を満喫してるのだろうと思っただらそんなところに行つていたらしい。

「いやいやいやいや、お前何してんの？ じゃあ何？ お前もキリスト教徒なわけ？」

「そんな訳ねえだろ。内申が上がるんだよ、参加すると。推薦枠がとれるの。わかる？ 東京の偏差値が高いミッション系の大学に行けるわけよ。そつちを取り逃しても、内申さえ良ければ関学にはエスカレーターさ」

「そういえばお前、その付属だったな」

「おうよ、特進クラスだ。すげえだろ？」

糞、と、思いつきりシーソーを蹴り上げると、いてえ！ と祐介が悲鳴をあげる。

「何すんだよ、つてーな」

「この野郎、馬鹿野郎、てめえ自分だけバラ色の人生レールに乗りやがって。そのままゆくゆくは国家公務員か？ 俺のことを鼻で笑う人生送るつもりなんだろ」

「東大京大に行くわけじゃあるまいし、そんなの無理に決まってるだろ」

そこまで言いかけて、わめきたてる兄を見ながら、ああ、ああ、聞いてやいない、と祐介は目を線にする。「そんなことより騒いでると、出てきたアレに見つかると」などと言おうとしたところで、その忠告が既に遅いことを知り祐介は黙り込んだ。

「おい、白豚。何してんだこんなところで」

正臣が振り返ると、そこには怒り心頭と言った様子の法月司が仁王立ちしていた。

「は？ つけてたの？ 馬鹿じゃないの。最低、ほんと最悪なんですけど」

法月司は怒っていた。まさに怒髪天を衝くとも言わんばかりだ。怒りに駆られて喚き散らす妹に、兄二人はシーソーの上で縮こまってその説教を聞いていた。

実際に尾行したのは事実であるし、自分のプライベートの場に家族が乱入する恥ずかしさは正臣自身よくわかっている。授業参観の日にたまたま仕事が休みだと言ってやってきて、教室ではしゃぎまくっていた自分の父親の姿を思い起こせば、今でも顔から火が出そうだ。

「白豚だけならまだしも、祐介に今まで一緒になつて、なにやってんの？ そんなに妹のプライベートをのぞき見したい訳!？」

「俺は兄貴に時給七百八十円で雇われてるだけだ。クレームなら雇用主に言ってくれ」
「おい、そこで逃げるなよ」

「白豚あ！」

そそくさと安全圏に退避する弟に正臣は手を伸ばすが、それを真に受けて司が更にヒートアップした。茶髪を一本にまとめて、すらりとした体にそろそろ夏を意識した涼し気なワンピース。見た目は完全におしとやかなお嬢さんなのに、そのお嬢さんは怒り心

頭で鬼のように怒鳴り散らす。あまりの気迫に兄弟そろってたじたじた。

司は、ひいき目なしに見てもそこそこ可愛らしい風貌をしている。身長はやや低めだが、目は二重の切れ長で、鼻筋も良く通っている。一年前まではぶくぶく太ってデブスなどと呼称するのが実に似合っていたのに、この一年で急に痩せて綺麗になったのだ。

思えば痩せ始めた頃あたりから日曜日には出かける習慣がついていたようなので、教会に行きだした時期と合致しているのだろうか。

「悪かった、悪かった。俺はお前のことを心配してだな」

「なんで心配？　なんか心配される要素とかある？」

「そりゃ心配するだろ。妹が怪しい宗教に嵌ってるなんて知ったらさ」

「ぼっかじゃないの？　世界三大宗教のどこが怪しいって言うのよ。じゃあ、あんた、街中歩いてるお坊さんや、神社の境内で掃除してる巫女さんにも、うさん臭い宗教だとか面と向かって言えるわけ？」

「いや、別にそういうわけじゃ」

「おい白豚、お前、巫女さんは好きか！？」

「大好きだ！」

死ね！　という言葉と共に正臣の腹部に回し蹴りが突き刺さる。その後腕を組んで、明らかにうさん臭いものを見るような目で司は正臣を睨みつけた。しばらくなにやら考えるような仕草を行って、ふん、と鼻をならす。

「そんなに胡散臭いって思うなら中に入ってみたら」

そして正臣、そして横にいる祐介に向かって、司は教会のほうを親指で差して見せた。

○

宗教施設の中に入るといふ体験を受けて、正臣は死地に入るような面持ちであった。正直な話、一生縁など無いだろうと思っていた場所に入る羽目になったからである。

いやあるか、結婚式の時ぐらいは……と考えて、正臣は自分が結婚できる気がしないことに盛大にため息をついた。だめだ、やはり一生縁はなさそうである。

しかし、実際に正臣と祐介を待っていたのは大勢の人間による大歓迎であった。目の前にどんと置かれた大盛りのきつねうどんと、大量の稲荷ずしを目の前にして、正直何が起こったか把握しきれしていない。

「へえ、じゃあ祐介君は、司ちゃんがここにきてるの知らなかったの？ そろそろ一年になるのにな」

「いや、俺は基本的には兄弟のやることには干渉しない主義なんで」

「でも、何だかんだで付いてきてるんじゃない。ドライに見えて意外と妹思いなんだね」
意外、なんて、女の子に囲まれながらきやいのきやいのと横で話している祐介の様子にやっと我に返って、いやいやいやいや、と正臣が声を上げる。

「なんでお前一瞬で馴染んでるの？」

「なんでって、ここに居る子ら全員クラスメイトだし」

綺麗どころばかりの女性陣を侍らせながら、正臣は真顔で返答する。

もともとお嬢様学校なんて言われていたミツシヨン大学付属の高校に通っているご令嬢なら、確かに日曜日の教会に居ても可笑しくはない。なんとか様がみてるよろしく、「タイが曲がついてよ」とかそんな会話をしているような容姿端麗の綺麗どころばかりがそこには勢ぞろいしている。

その様子を見てみると男子禁制という単語が連想されふが、妹が先にお邪魔しており、そしてその中にクラスメートが何人かいるというアドバンテージがあれば、この場に馴染むことも決して不可能でないかのように思える。そして正臣は、この場で本当に異邦人（アウエー）なままなのは、自分だけだという事実が気が付いた。

祐介はこのような異世界においても、一瞬で自分の市民権を勝ち取ったのである。我が弟のリア充ぶりは、こんな異世界においてさえいかに発揮されているようだ。本当に末恐ろしい存在である。

「若いからたくさん食べれるでしょ？ お金はいらからとんとん食べな」

とはいえ、正臣も正臣で歓迎されていないわけではない。ただし、正臣の方はマダム陣に人気があるようだ。食べても、食べても、目の前にきつねうどんと稲荷ずしが追加されて行く。謎の油揚げ責めに溺れそうだ。ここはもしかしたら教会ではなく、伏見稲

荷の社なのではないかしらんと疑うほどである。

「教会ってパンとかシチューとか食ってるイメージありましたけど、うどんなんすね？」
祐介が不思議そうな声をあげると、正臣も、「そうよ、それよ、それ」と顔を上げる。
なんでこんなに油揚げ責めなのかの理由説明を断固求めたい。

「スーパ―で業務用が大安売りしていたからよ」

「稲荷ずしやきつねうどんは大量につくれるから、みんなで食べるのに向いているのよ」
実に合理的な理由が帰ってくる。教会という異世界の中で、現実的な理由を返答されると、何故か納得する前にもやもやする。そこは聖なるなんたらとか、不思議な理由をつけてほしいところだ。弟の祐介も同じ感想を覚えたのか、質問を続ける。

「いや、でももつと、パンと葡萄酒とかそういうイメージっすよね」

「ああ聖餐式ね。そういうのは礼拝の中でやるのよ。月に一回ね」

へー、そうなんだあ、と知りたくもない知識ばかりが増えて正臣はげんなりする。正臣を教会に連れ込んだ司は、別のグループで子供たちの相手をしているようだ。

「司ちゃんは子供たちの相手を良くしてくれて助かりますよ。家族も誘えればいいって、いつも言っていましたから、今日は本当に良かった。神に感謝しなければ」

正臣の前に面と向かって座っているのは、教会の牧師先生らしい。ワイシャツにネクタイ姿で、正臣の知っている黒衣の牧師姿とはずいぶんかけ離れていた。正直隣に座っている、髭の生えた黒ずくめのおじ様のほうがそれっぽい。

最初は教会に来ていた信徒の一人かとおもったら、いきなり牧師だと名乗られて度肝を抜かれた。まだ三十代か四十代ぐらいに見えるのに。隣にすわってる七十歳ぐらいの重鎮っぽい人より偉いらしいのだ。

奥さんもかなりの美人で、切れ長の目をした中国人女性である。牧師先生とやらの横に立って、にこにここと笑っている。

普通年が高い方が偉いものではないのだろうか。本当に宗教ってというのは意味が分からないと、腕を組んで正臣はうなつた。

見ればさつさと食べ終えた祐介は、その辺においてあるギターをひつつかんで、女子達とよろしく歌など歌っていた。大人達に囲まれて包囲されている正臣とは大違いだ。

いや、お前助けろよ、と腕を上げたくなるが、下手に身動きでも取ろうなら洗脳されそうな勢いだ。それを見かねて助け舟を出したのは、遠くでその様子を見ていた妹の司である。

「ほーら、うちのおにいちゃんが遊んでくれるってさ」

それを聞いた子供たちが大喜びで正臣の方に突撃してくる。小学校一年か二年か、小さな子は幼稚園児までいるようだ。

「お兄ちゃん名前なんていうの？」

「正臣だけど」

「よっしゃー！ まさおみ、人生ゲームやろうぜ！」

「神経衰弱がいい」

「五目並べしよー」

きやいきやいと、男女入り混じって正臣は端つこの遊戯スペースのようなどころに引つ張って行かれる。美味いこと大人の包囲網を抜けることに成功した。今回ばかりは妹にフラインプレーの賞状を送りたい。

「すいませんね、来てもらったばかりなのに子供たちの世話まで押し付けてしまつて」そんな様子に、牧師先生も、他の大人たちもにこやか顔である。得度も知れない大学の男が急にやつてきて、子供たちに接近しているのに大人たちは誰一人顔をしかめない。少し警戒心無さすぎじゃないかとは思うが、大人たちに取り囲まれて宗教勧誘されるよりは大分まだ。

正臣の膝の上にかわいらしい少女がちよこんと座って陣取って見せる。小学校の一年か二年ぐらいだろうか。ふんす、と息を吐き出して、特等席は私のものだとも言い上げた。

少女が当たり前のように膝の上に載っている状態で始まった神経衰弱に、正臣は心底驚愕していた。常識的に考えて、自分の人生では決して発生しないだろうシチュエーションが、今まさに実現しているからである。

「初対面の少女が俺の膝の上ののってるんだけど何か質問ある？」とかネットで実況しようものなら嘘をつくなど袋叩きにされるか、写真うぶとか言われて祭りが起こって

大騒ぎになることもやむなしの重大事件だ。

教会にすれば幼女と遊びたい放題。まさかそんな特典があるとは夢にも思わなかったが、それと同時に正臣は、実際その立場になればなんてことはない、ただの子供のお守りであるという現実も知ることになる。少女をひざに乗っけながら、まったく反応しない自分を顧みて、自分は小児性愛者（ロリコン）では無かったという、深い哲学的洞察を得たのだ。この体験は今後の人生で大きな糧となるであろう。

結局、神経衰弱やら、人生ゲームやら、多くの遊戯に付き合わされて、やいのやいのとやっている間に、教会の中からは人が段々と人気が少なくなっていくた。

そろそろ二時間以上経っただろうか、人生ゲームの紙幣を数えながら正臣が時計を見ようと目を上げると、奥の方で司がテーブルの上で分厚い本を広げている。

あれが噂の聖書とやらかな？ と思ったらどうやら違うようだ。立ち上がって後ろから覗き込むと、そこには何も書かれていない真っ白なページが広がっている。

「気になりますか？」

後ろから急に声を掛けられ、驚いて振り返ると牧師先生が立っている。名前は佐藤文明（さとうふみあき）という平凡な名前だ。一重に細目、髪は黒く短髪で、髭は生やしていない。年齢は三十代後半ぐらい。牧師と名乗っているが、くたびれたサラリーマンにしか見えない。

「ああ、妹が随分真剣に見ているみたいなので」

言葉につまり、苦し紛れにそう返すと、文明牧師はああ、とうなずいて見せる。

「あれはね、白い本というものです」

「白い本？」

「この教会は出来てから今年で八十五周年なんですが、初期のころに信徒の中のどなたかが寄贈されたものなんですよ」

お世辞にも歴史がありそうに見えないぼろぼろの教会が、今年で八十五周年というのにまず耳を疑ったが、白い本という言葉に正臣は注意を向ける。

「白い本ってなんですか？」

「よくわからないですが、そう呼ばれているらしいのです。中はなんて事のない白紙が挟まれた本なんですけどね。多分、年代物の日記帳か何かだと思うんです。私と妻もここに來てからまだ七年目なので、詳しくはよくわからないですよ。ただ……」

「ただ？」

「その本の持ち主は『この本を開いたとき主に出会った』と信仰告白したそうです。八十五年前は、熱狂的なキリスト教最盛期の時代でもあったので、そういった奇跡体験の逸話が多く残ってるんですよ」

「キリスト教最盛期？ そんな時代があったんですか？」

「ええ、昭和の時代はキリスト教ブームとも言える時代だったんですよ。なにせ、公共の電波でキリスト教の布教アニメが放送されていたぐらいですから」

カズノコプロって知りませんか？と小首をかしげる文明牧師の言葉に、正臣は衝撃を受ける。

「看護婦エンジェル小由美ちゃんとか、アイドルジャッジ・パラパラとか作ってるあのカズノコプロですか！？」

「そのあたりは……私は知らないのですが、私たちの世代だとチャイナボカンとかの方が分かりやすいんですけどね。まあ、そんな時代もあったんですよ」

興奮気味に食いついてしまったことに気づいて、慌てて赤面して正臣は取り繕う。こんな場所でオタバレなんて最悪以外の何物でもない。

「へえ、じゃあ、そんな時代だからこそ、こういうオカルト染みたものも出回ったんですね？」

正臣が話題をそらすと、優しい文明牧師は追及もせず話を続けてくれる。

「昭和当時、日本は割とキリスト教に熱狂した時代だったんです。私たちの教団もその時代に一気に拡大して全国に広がりました。それはいいのですが、世間が宗教に熱狂すると、まゆつばものの奇跡体験や都市伝説がどうしてもつきものになってしまいます。その結果、私はあれを見た、これを見たという人々が少なからず現れるんです。実際はほとんど勘違いであったり、誇張表現だったりするのですが」

なんと、今日で世界が終わるので、山に集まれと大号令をかけた人間まで現れたらしい。正臣から見れば正気の沙汰ではない。

「あの白い本も、その一冊です。私は正直半身半疑なんですよ。でも、神を見たといつて喜んで寄贈されたものでもあるので」

寄贈者の体面を考えればすげなく処分するわけにもいかず、こうして教会の本棚に何十年も収まる結果になったらしい。「ぼつかいてきはいいりよ」というそうさだ。

司が見ているその本は、装丁自体は革造りの立派な本だ。中のページも何十年もたつているとは思えないぐらい、日焼けもなく真つ白な姿を保っている。

「司さんは、最初あの本を見せて欲しいといつて訪ねてきたんです。驚きましたよ。最近近はネット、ですか？　そういうのでなんでも調べられるものなんですわね」

そこまで聞いて、正臣はなんで妹がこんな教会なんていう不思議な世界に入り浸っているのかをやつと悟つた。そして、内心胸をなでおろして安心したのだ。

司は後ろで二人が話しているのも、まるつきり無視して目の前の白い本を何回も何回もめくっている。内容を読んでいるというよりは調べているようだ。牧師も驚いていなから、おそらく暇になるとずっとこれをやっているのだろう。その集中力だけは評価に値する。

妹は決して宗教に嵌って教会に脚を踏み入れていた訳ではなかったようだ。正臣は心底その事実に安心した。

なぜなら妹は根っからのオカルトマニアで、そのためならばあらゆる手段を辞さない性格だからである。妹の目的はあくまであの白い本。そのためにはキリスト教徒の振り

でもなんでもやってのけることを正臣は知っている。

妹は宗教に嵌ったわけではなかった。その事実だけが正臣にとっては大事なのだ。

牧師先生はその後もなんだかんだと解説していたが、安心した正臣の耳にはその言葉は聞き流されるのみだった。

○

法月司(ほうづきつかさ)はオカルトマニアである。オカルトマニアに堕ちた理由は、華々しい関西デビューの失敗が原因であった。

弟の祐介と違い、この妹の司も正臣と同じように、東京から神戸への大移動に耐えられなかった口である。そういう意味では、正臣にとって司は、祐介よりは血のつながりが濃いように感じられる。根本的な性格は似ていると思うのだ。そんなことを不意に話したときは白豚と罵られて、蹴られたが。

神戸市内に引っ越した時分、司は小学校三年生だった。当然のように関西の「ノリ」についていくことができず、見事なまでに友人関係の構築に失敗したのである。

最初の失敗は、些細なところからだった。「自分、餡好きやろ？」と、友達が餡をくれたことが発端である。語弊が無いようにあらかじめ言っておくが、神戸の人々は気さくで良い人ばかりである。

しかし、東京からやつてきたばかりの司は、「自分」という言葉遣いがよくわからなかった。関西弁では「お前」と同じようなニュアンスで使われる、いわゆる代名詞なのが、司はその言葉を「俺は飴がすきじゃん？」と言う意味合いで受け取った。

俺は飴が好きじゃん？と言われてもなんて返して良いかわからない。なんで自分が好きなものをこっちへ見せびらかすのだろうか。ひよつとして、からかわれているのだろうかと、そう受け取ったのだ。実際は、「君、飴好きだろ？一個上げるよ」という小学生同士の心温まる友情の始まりのセリフだったのである。

しかし、からかわれていると誤解して怒った司は、その飴を突き返してしまった。「そんなに好きなら自分で食べればいいじゃん！」

……と、そう返してしまったのである。使っていた言葉が東京の言葉であるのも良くなかった。東京の言葉は関西では随分と乱暴な言葉に聞こえるのである。

これは、関東人が関西弁で怒鳴られると相手がやくざに見える現象と似ている。かくして芽生えるはずだった友情は芽生えず、関東人憎しの関西の洗礼を受けてしまうことになったのである。

見事なまでに「はぶられた」司は、一年以上図書館に引きこもって本ばかり読んでいたらしい。最初は児童文庫の「すっころび三人組」や「ウイズダミー」などのファンタジー物の本を読んでいたが、やがてそれを読みつくすと、暇を持て余して学校になぜか全巻揃っていた「本当にあった怖い噂」シリーズに手を出し始めた。そして奈落の底に

落ちて行つたのだ。

一年ほど経つと、流石に馴染んだのかある程度友達もできるようになってきた。

しかし、司はオカルト本漁りをやめなかった。関西人との関東人の対立構造がすっかりトラウマになってしまったのである。

関西人が関東人を目の敵にするなんていうのは、漫画や小説などでよく出てくる「設定」である。そんなもの、作り話の誇張された都市伝説だと思つていたが、実際には思つていた以上にそれは露骨だった。結果、司は心から気を許せる友達に恵まれず、オカルトを卒業できなかったのである。

一時期、それでも関西弁を覚えて仲間に入れて貰おうと努力したのだが、真似して練習していたら「馬鹿にしてんのか」と怒られたので練習もやめてしまった。

正臣も同じことをして、同じように怒られて、関西弁の習得に挫折している。外様の人間はどうあがいても関西弁ネイティブには近づけないのだ。

そういう意味でも、正臣は妹に親近感を覚えるのであるが、当然妹はそれが気に入らず、同族嫌悪も手伝つて、兄を白豚と罵り続けた。

しかし、それでも正臣は司が「腐らなかつた」ことに對して、見たこともない神に感謝している。これは僥倖……いや、奇跡とすらいえるからだ。

妹の部屋が特殊な性的嗜好の本で埋め尽くされなかつたことに對して、兄二人は手放しで喜んでいた。

しかし、その代償に、オカルト本で司の部屋の本棚は埋め尽くされることになった。「悪魔辞典」「ソロモンの七十二柱」「サタン」「幽霊学」「霊体大全」「降霊術入門」「幽体離脱のススメ」等々。年頃の娘の本棚を埋め尽くすには、決して健全なラインナップとは言えないだろう。

最初は怖い話系の本を買いあさって読んでいる程度だったが、やがてそれに付随して、司はオカルトの「現地調査」を始めるようになった。近所の「出る」と言われる場所を回っているだけでは飽き足らず、中学一年の夏休みには一週間程失踪事件まで起こしたのだ。

当然のように大騒ぎになり、どこに行ったのだと両親がうるたえていたら、一週間後にあっけなく帰ってきた。両親が怒って行先を問いただしたところ、なんと溜めたお小遣いで心霊スポット巡りをしていたらしい。

そんな妹であるから、そのオカルトへの入れ込み具合、そして恐ろしいまでの大胆さに、正臣も、家族も大いに脅かされることになったのである。

司が「ひとりかくれんぼ（交霊術の一種）」を実際にやろうとして、正臣が阻止したところが三回（正臣はネット知識でひとりかくれんぼを知っていた）。部屋に巨大な模造紙を敷いて魔法陣を書こうとしたところ、それに気づいた祐介が阻止したことが三回あった。その時に購入した黒魔術書は、今も司の部屋に収められている。さらには一時期魔女のまねごとまで始めて、ゴスロリ趣味に走りそうになった。

しかしこれは、司がそれを着ているところ偶然見かけた祐介の「ハロウィンかな？」と言う率直な感想で見事なまでに打ち砕かれることになる。あまりにも恥ずかしかったのか、黒歴史として司の趣味からひっそりとゴスロリは抹消された。衣装は現在も若気の至りとして、こっそりとクローゼットの奥にしまわれている。

そんな司の現役中二病は、中学二年生間近になってもとどまるところを知らなかった。リアルでの活動が兄達に阻止されることを学習した司は、現役の某巨大掲示板のオカルト板住人となつて、活躍の場をネットに移した。

そして自慢のオカルト知識を駆使して、有名なハンドルネーム持ちへ出世し、現在進行形で、「勘弁してほしいぐらい怖い話シリーズ」略して勘怖の話を掲示板に投稿し続ける怪談作家（自称）となつたのである。その文才は嫌な形で花開き、代表作の「現実」や「背高女」はネットの中で伝説呼ばわりされ始めている。某極楽先生など、漫画でまで取り上げられる始末だ。

そんな行くところまで行く妹だからこそ、宗教に嵌りだしたら大変なのである。宗教に嵌って行くところまで行くぐらいなら、家の中で魔法陣を書いてくれた方が幾らかましだ。

そんな訳で、正臣は本当に心配して、司の様子を見に行こうとしたのである。高い時給を祐介に払ってこっそり偵察に行くぐらいにはだ。

「今は午後四時、午前九時からだから、しめて五、四六〇円ね」

「ああ、くそ、そういえばそうだった！」

夕方の帰り道、祐介に真顔で「給料」を請求された正臣は、時給で祐介を雇っていたことを思い出して、頭を抱えて悲鳴を上げる。

今月は、獣人娘アニメのDVDに「お布施」するつもりだったのに、これで来月まで待たねばならない。祐介はそんな兄を眺めながら、休日を潰された意趣返しとばかりにニヤニヤしている。

「まあ、でもなんだかんだで、おにいちゃんが来てくれて助かったよ。いつもはあの子達、ぎりぎりまで逃がしてくれないからさ。ゆっくり本が見れなかったんだよね」

先を歩きながら、司が正臣たちを振り返って声をあげる。呼び名が白豚からおにいちゃんに戻っているので、きつとご機嫌は回復したのだろう。

「やっぱりお前、あの白い本とやらが目当てで教会行ってたんだな」

「あつたり前じゃん。あんな面白い本、オカルトハンターの司様が見逃すはずないでしょ？ ネットのつかちーの妖怪ポストにタレコミがあつてね」

つかちーの妖怪ポスト、というホームページを作つて、そこで全国のオカルト情報を収集するのが司の日課なのである。膨大なガセと、数少ないガチを見分ける鑑定眼あつてこそこのシステムだが、司はそれをどういう訳かやってのけている。

ふんす、と胸を張つて息を吐き出す司の様子を見て、ああ、ひぎに乗つてた少女はこ

れを真似したのかと正臣は納得顔で頷く。

「でもよ、俺も見ただけどただの真っ白な本だっただろ。オカルト云々真っ赤な嘘なんじやないの？」

一緒に歩いている祐介が後ろから声を上げると、甘い甘い、と司は指を振ってこたえて見せた。

「お兄ちゃんも祐介に何も知らないんだね。あの本はね、実際に関わってる人が何人か行方不明になってる本物のオカルトなんだよ？」

その言葉に、正臣は思わず立ち止まった、本当かよ？ と声をあげる。

「面白いと思わない？ お兄ちゃん。私の知ってる限り、日本には古今東西様々な怪談や都市伝説が存在するけど、教会が題材に扱われたことって一度も無いんだよ」

いわれてみて、確かに思い当たらないな、と正臣は小首をかしげる。精々思い当たるのは西洋映画のエクソシストぐらいのものである。もしかしたらあるのかもしれないが、少なくとも有名にはなっていない。

「まあ、実際にはホワイ・ライト・シンドロームっていう三人組の女の子が出てくるオカルトゲームで一回だけ扱われてるんだけどさ。だからといってこの出現率の低さは異常なんだよ」

「単純に教会に馴染みがないからじゃないのか？」

「お寺や神社だって、ぶっちゃけ日本人の一般市民には馴染みがないじゃん。神社の奥

がどうなってるかなんて知ってる人は少ないと思うよ。でも平気で登場させるでしょ。大体でてる神主さんやお坊さんが死んじゃうっておまけつきでさ。本当に、あんなほんぼん誰彼死んでたらさ、誰もお坊さんなんてならないとおもうよ」

「だから、作り話だろ？」

「作り話だからこそ、なんで教会が舞台にならないのか。ミステリーだと思っただよね、私は」

司は正臣を指さして声をあげる。

「だからね。この白い本っていうのは、オカルト話の中でも、多分、おそらく、かなり異質なものなんだよ。私はこの白い本の話はとんでもないものだとおもってる」

「おまえ、どうしたんだ、大丈夫か？ なんだか変だぞ？」

正臣は司が、どこかいつもと違うような気がして心配そうに声をあげる。

その言葉に、司は数秒ほど真顔になって。ううん、と唸って唇を尖らせながら視線をそらした。

「……ま、多分の話よ。でもあの本が寄贈された昭和当時の事件、新聞の切り抜きなんかも調べてみたんだけど、行方不明になった人は実際にいるみたい」

「文明先生とやらは、そんなこと一言も言っただろ？」

「あの先生はまだ来てから七年ぐらいしか経ってないから、昔のことはよく知らないんだよ。先生より、香月さんとかの方が昔の方には詳しいんじゃないかな」

ああ、牧師先生の横に座っていたいかにも重鎮顔の髭のいかついお爺さんね、と正臣は思い出す。教会の牧師といっても、教会のことを昔のことまでなんでも知っているわけではないようだ。八十五年も歴史があるなら当たり前か、と妙に納得してしまう。

「そういえば、お前その本いじくりまわしてる時、心ここにあらずって感じだったぞ、後ろで兄貴や牧師先生が話してても、ぴくりとも動かなかつた。だろ本当に大丈夫なのか？」

それまで黙っていた祐介が、横から口をはさんだ。

すると司はしばらく無表情になって、視線を右上の方にずらしてみせる。

「別に、何も無いよ。ただ……」

「ただ、なんだ？」

やはり司の様子がおかしいように思えて、正臣は怪訝な顔で声を上げる。

司は正臣を見て、そして祐介をみて。またしばらく真顔になった後、急にぷつと噴き出して、大声で笑い始めた。

「なーんちゃって。二人ともちよつと怪談聞いたぐらいでマジになりすぎだつて。教会に通ってるのも、みんなと仲良くしてるのも、みんなあの白い本を探るためなんだから。だからいいね、おにいちちゃん達。私の調査の邪魔をしたらだめよ？」

じつと睨むように上目遣いで見上げられ、正臣と祐介はわかりましたと両手をあげる。別に宗教に嵌っているわけではなく、いつものオカルト魂故の行動ならばそれでいいのだ。

祐介も、もともと兄妹のやることには干渉しない主義である。放っておいてくれと言われれば、放っておくだろう。

得体のしれない物は安心できない。だから不安だったのである。正臣は手を伸ばして、ぼんぼん、と妹の頭をなでながら、まあ、頑張れよ、と声をあげる。

「撫でんな、白豚！」

勿論その行為は司の嫌悪の大将だ。制裁とばかりに、右の頬にグーを貰い、やはり自分はこの扱いなのかと正臣は心底自分の不遇を嘆いた。

「……」

その様子を眺めながら、祐介だけは眉間にしわを寄せて司を見つめている。兄とじゃれ合う妹の眼が笑っていないことに、祐介だけが気づいていた。

○

さて、邪魔をするなど言われればしたくなるのが兄心という訳で、正臣はそれからも日曜日に教会へ出かけるようになった。朝に出かけていって、二時間ほど礼拝の席に座る。ひたすら退屈だ。牧師の説教も何を言っているのかわからない。

歌って、祈って、訳の分からない呪文を唱え、そんなもって先生の話聞く。しばらくすると歌を歌い始めて、献金とやらで金をせびられ、また歌う。

どんだけ歌うのが好きなんだよ、というのが礼拝に出た感想だ。正直何をやっているのか理解できなかったが、とりあえず黙って座ってるだけで終わってくれるのはありがたい。

どういうわけか、隣には祐介も座っている。決して誘った訳ではないのだが、時給も要求せずにやってきては、自分の隣に座って話を聞いている。

礼拝中は黙って座っているだけで良いのだが、決して声をあげたりしてはならない、という暗黙のルールがある。何かすることを要求されたりするわけではないので、楽といえは楽だが、ひたすらに退屈であるのはいかんともしがたい。

かといって、礼拝している間外にでて、昼時に戻ってきて飯だけ食べるのでは、たかりの類と言われても反論できない。それは嫌だったので、正臣は礼拝に出て、食事に対しても百円か二百円か出して食べるということを行っていた。プライドの問題である。

昼時が過ぎると、祐介はギターで「青年の交わり」とやらに参加している。教会に通い始めてから一か月。正臣の役割は子供の面倒を見ることになった。

相変わらず少女が自分の膝の上に陣取っている。名前は香月由良（こうづきゆら）というらしい。聞いてみたところ小学二年生だという。

「お兄さん、随分と由良ちゃんに懐かれますね」

子供数名に囲まれて神経衰弱をやっていると、後ろから声を掛けられた。正臣が振り返ると、祐介のクラスメートの一人がそこに立っていた。

「ああ、えつと……」

「聖です。塚本聖（つかもとひじり）です」

「おお、トロ子！一緒に遊んでくれるん？」

自己紹介をする聖に、ひざの上に乗っている由良が元氣よく声をあげる。

「いいの？じゃあ私も入れて貰おうかな？」

聖は黒の長髪を後ろで一つに纏めた飾り気のない姿だ。おっとりといった形容詞が似合いそうな雰囲気を持っており、のんびりとした受け答えを行う。特徴的な部分があるとなれば、身長が一八〇センチメートル程もあって、非常に高いことだろうか。

子供達からは人気があるようで、誰も彼も聖のことをトロ子と呼んでいるようだ。なんでトロ子なんだと思っていたら、カードを選ぶ動作で大分もたついている様を見て、なるほどトロいんだな、と妙に納得してしまう。

「ごめんね、ごめんね」

などと言いながら、結局めくるけれどもハズレという有様だ。もー、トロ子はこれだから、などと由良が声をあげる。

聖もそういわれながら、にこにここと笑っている。随分気立てのいい娘さんのようだ。

「お兄さんは子供が好きなんですか？嫌な顔せず遊んであげてるから」

「ああ、まあ、嫌いではないけれど」

トロ子（と、子供達に倣って呼ぶことにする）の問いかけに、正臣は頭を掻いて濁っ

た返事を行った。正臣が子供と遊んでいるのには二つ理由がある。一つは、子供と遊んでいる間、大人に取り囲まれることが無いからだ。大人に取り囲まれると少し厄介なことになる。私生活やらなにやら、根ほり葉ほり聞かれるのだ。

これは別に、教会の中のことに限らず、町内会の行事に手伝いに出かけたりした時も同じである。正月に餅つき大会に出かけたら、暇な近所の爺様婆様に学校生活のことを根ほり葉ほり聞かれて苦労したものだ。基本老人は暇で、若者の生態に随分と興味があるようである。

もう一つは、司を監視するのに良いポジションだからである。「子供と遊んでいる」と認識されている間は、教会に來ている大人たちは正臣に注目しない。子供と遊んでいるという情報を得て満足しているからだ。何もせずに妹をじつと見ていると嫌でも目立つ。だったら、何かの片手間に妹を監視したほうがやりやすい。

「この子、家が少し複雑な事情なので。日曜日に限らず教会で預かっているんですよ」
「特殊な事情？」

困ったようにトロ子は眉尻を下げて、由良の來ているシャツの裾をまくって見せる。そこに残っている生々しい痣を見ると、正臣は眉を顰める。

「ちよっとトロ子、何するん」

「由良ちゃん、お兄さん達のこと好き？」

「まさおみとゆうすけのこと？ 勿論好きだよ。正臣も祐介も殴らないからね。怖い感じ

しないし。でも、遊んでくれるからまさおみの方が好きかな」

あつげらかんと当たり前のように言葉を返す少女に、正臣は絶句した。しばらくして、お前も苦労しているんだな、と、由良の頭を撫でてやる。

当の由良は、何故撫でられているのかよくわかつていないようだ。教会という場所は、少なからずこういった境遇の子供も出入りしているようだ。

トロ子は由良を撫でている正臣の複雑そうな表情を見て、目を細めてほほ笑んで見せる。その笑顔は大分好意的なようだが、正臣はトロ子の表情に気づかない。

「それに、司ちゃんの事、随分気になつてゐるみたい。ずっと見てますよね？」

「え、なっ……バレてました？」

「バレてました」

にっこりと笑つて、トロ子は正臣の顔を覗き込んでくる。意外と見ている人は見ているようだ。もう少し気を付けないと……と、正臣は内心舌を巻く。

「何か心配事でもあるんですか？」

「いや、あの白い本ってヤバイらしいじゃないですか。大丈夫なのかなって」

なんで年下の高校生に敬語を使っているんだろうと、正臣は自分で自分につっこみを入れる。けれどもいきなりタメ口も変なので、そのまま会話を続けた。

白い本の話が出ると、トロ子は、ああ、と声を上げる。

「あの本、面白いでしょう？ 触つてると神様に逢えるらしいんですよ」

「神様？」

「ええ、でも、天にまします我らの父よ、なんていう割には、可愛い女の子だって聞きますけど。私は見たことないからわからないですけどね」

冗談なのか、本気なのか、けらつと笑ってトロ子は白い本を指さしている。

「名前はエリちゃんっていうらしいですよ。面白いですよね」

「そんな噂どこから聞いたんですか」

「まさおみ、早くめくれよ！」と膝の上の由良が声をあげて、正臣はカードをめくつていく。三組程手に入れると「それめくろうと思ってたんに」と数人子供が頭を抱える。

「あ……えっと、ごめんね。私の番だね、えっと……」

一しきりめくつて、やっぱりはずれだったあとで、トロ子は顔を上げて正臣に言葉を返す。

「この教会でもあの本で神様に逢ったって人が数人いるんですよ。あそこにいる芽音ちゃんと、あつちに居るテレサちゃん」

二人の少女を指を差す。一人は黒髪をそのまま下ろしているお嬢様然とした芽音という高校生。もう一人は金髪碧眼の少女のテレサという少女だ。

「荒木芽音（あらかきめね）ちゃんと、留学生のテレサ・ティガールちゃん。二人とも私のクラスメートなんですよ。可愛いでしょう？」

私と違って、と、トロ子は苦笑しながらめくったカードを戻している。トロ子こと聖

も、普通に可愛らしい顔つきをしているようにみえるが、女性の美人基準はよくわからない。

「ええ、何々？ 私の事で噂とかしちやってるんですか？」

そんな二人の視線に気づくと、芽音が微笑みながら、こちらにぐいぐいと近づいてくる。二人の間に合意に割り込むと、トロ子が「わわっ」と悲鳴をあげた。

「どうしたの芽音ちゃん、テレサちゃんと話してなかった？」

「トロ子ちゃん経由で、不本意なことを話されたりばらされたりしたら怖いですしねー。積極的自衛ってやつですよ」

ふふふ、と口元を丸めながら芽音はトロ子の顔を覗き込む。確かに、どこか抜けているようなトロ子だから、うっかり口を滑らせて何か言うかもしれない。実際何度も妙なことを言われているのだろう。芽音の眼が笑っていないのを正臣は確かに見る。

「お兄さん、結構評判良いですよ。子供の面倒を嫌がらずにみるなんて、中々イケメンじゃないですか？」

「ええ、いや、別にそんなことはないと思うけど」

たじろいで返答に困る正臣の姿をみて、芽音はニヤニヤと笑う。女子高生グループの中では一番お嬢様、といった姿形をしている割には、喋ると一番俗っぽい印象を受ける。人を見かけて判断してはいけないうた。

「それですよ、それ。祐介君と違って女の子に近づかれてもぐいぐいっと来ませんよね？

お兄さんにとつては割と今の状況、ハーレムだと思ふんですけど？ その辺りどうなんですか？」

「ちよつと、やめなよ芽音ちゃん。お兄さんは場をわきまえてるだけだと思ふよ？」

芽音の不躰な質問に、トロ子がたしなめる様にフォローするが、芽音は目を輝かせて正臣への追及をやめようとはしない。

「いやいや、トロ子ちゃん。これは重大な問題なんですよ。お兄さん、もしかして女の子には興味がない？ 答えて。これは私だけでなく、全乙女の重大な問題なんです」

「ああ？ ああ、まあ、別に彼女は要らないかな。十分間に合ってますよ」

何かを思い起こしたように、正臣は少し真顔になってから、芽音に手を振って返答を行つて見せる。それを聞いた瞬間、芽音は両手を振り上げて手を握り、よし、と叫んだ。

「ということは、祐介君一筋つて感じですか、お兄さん。失礼ですが、受け責めで言え、どっち——」

そこまで質問したところで、真顔のトロ子のチョップが脳天に突き刺さる。さすがの芽音も、ふぎや、と悲鳴を上げて地面に突っ伏した。

「芽音ちゃん。あれほどナマモノは禁止だつて。ここは教会だよ？」

そこまでのやり取りをみて、正臣は、はっとした表情で察する。

(こいつら、腐つてやがる)

これは、関わない方がよさそうだと正臣はそそくさとその場を離れる。人の性的嗜

好をどうこう言うつもりはないが、正臣にその気は断じてないのだ。

二人から離れた正臣は、さて、司の様子はどうかと改めて妹へ目を向ける。

司は相変わらず、周りに人が居るといふのに、それを目にも入れないで、白い本に向けて何かぶつぶつと呟いている。

時折、にやつと笑う様子は尋常ではない。本を読みながらニヤニヤする妹の姿は以前から何度も目撃している。またオカルトマニアがまた自分の世界に入っているや、と最初はあきれてその様子を見ていた正臣だが、しかしどうにも、今回の様子は尋常ではないように感じるのだ。

「兄貴、ちよつといいか？」

その時、横から祐介が声をかけてくる。さつきまでギターを弾いていたが、抜け出して此方へきたようだ。ちよつと、と、司を見ながらあつちのほうで話そうぜ、と親指で廊下の方を差す。正臣は頷いて立ち上がり、廊下に出た。

○

「兄貴、アレの様子どう思う？」

「どう思うって言われても、やっぱり尋常じゃないよな」

教会の廊下に出て、誰もいない場所で正臣と祐介はひそひそと相談を行っている。さつきから見張っている限り、司の様子が尋常ではないのだ。

最初に教会にやってきてから、今日で一か月ほど経つが、週を重ねるごとに司の挙動が可笑しくなっているように感じるのだ。最初は本に触ってぼうつとしていたのが、やがてぶつぶつと独り言をしゃべるようになり、そして、今日に至っては、何やら呟きながらにやついている。

「さつきこっそり近づいて聞き耳立ててみたんだが、司の奴、ナニカと喋ってるぜ」
祐介が眉をひそめて、困ったような顔で声を上げる。

「内容は雑談かなにか見たいなんだが……兄貴、アイツどうにも尋常じゃねえよ。脳内フレンドなんて作るような性格じゃないし」

「やっぱりあの本やばいんじゃないか？」

「何がやばいの？」

後ろから急に声を掛けられて、正臣と祐介は驚いて振り返る。そこに立っているのは、文明牧師の奥さんの李蒼（リー・ジャング）牧師夫人だ。

ベトナム系の中国人で、元は中国拳法の教室をやりながら、ひっそりと教会の活動をしていたらしい。

中国では、教会活動は厳しく取り締まられる傾向にあり、布教活動を理由に命を狙われることも珍しくないらしい。なので、極力目立たないように地下活動で伝道するが主

なのだそうだ。

文明牧師は、宗教的にはそれほどに危険な中国へ身分を偽り、日本語教師として宣教に行っていたらしい。ジャング夫人とはその時に知り合つて結婚したようだ。

綺麗な黒のサイドテールにアオザイを着ていることが多く、日本語は非常に上手で喋つても全く違和感がない。年齢は二十八歳程度。切れ長な目をしている中国美人で、正直あの冴えない牧師には釣り合つているように見えない。

「うちの妹がああ白い本に触り始めてから様子が変なんですよ」

「白い本？」

ジャングは祐介の言葉を聞いて眉を顰める。ううん、と唸つて腕を組みながら、何やら考えるように小首をかしげる。

「確かに、あの本は変わつてるわよね。青年の間でも触ると何やらつて話を耳にはさむから……」

でも、とジャングは言葉を続ける。

「私もあの本は何度も触っているんだけど、何も起こらないのよ。それに、特有の嫌な感じもしないのよね。むしろ暖かくて、とても安心できる感じ」

「でも触りながら独り言を言うなんて尋常じゃないと思うんですよ」

それはそうよね、と頷いて、ジャングは正臣と祐介の二人を見つめる。

「この教会の古い人たちに話を聞いて、あの本については少し調べてみるわ。だから、

調べがつくまではこの話は保留にしておいて貰って良いかしら」

下手に話を広げると、妙な混乱が起こる可能性があることを言っているのだろう。正臣と祐介はわかりました、と頷いて見せる。

ジャングが行ってしまうと、祐介は腕を組んで正臣に声をあげる。

「……ってことだけど、どうすんだよ兄貴？」

「まあ、牧師先生の奥さんの耳に話を入れたんなら、文明先生もなんとかするだろ。俺達はしばらく邪魔しないで待ってるしかないだろうな」

こういったことに関しては、俺らは素人だからね、と正臣は言葉を続ける。一か月前までは、こういった宗教施設に立ち入ることもしていなかった正臣達なのだから、オカルト方面には打つ手がない。オカルトは専門家に任せて置くしかないのだ。

とりあえず今日は帰ろうぜ？ と祐介に促されて、正臣も頷く。しかし、日に日に変化していく妹の姿に、正臣は強い胸騒ぎを覚えていた。

○

更に一週間経過して、唐突に事件は起こった。牧師夫人のジャングが失踪したのである。土曜日、教会内の掃除を行っていたジャング夫人は、夫の文明牧師にも行く先を告げないまま、荷物を残して突然居なくなってしまった。最初は買物にでも出かけたの

かと思っていたが、夜になっても、夜中になっても帰らないので、警察へ捜索願を出して、翌朝には警察官が何人もやってくるようになった。

警察の捜査の結果、荷物は無くなっておらず、誘拐されたのではないかと疑われている。警察がやってきたことで日曜の朝だというのに大騒ぎになり、礼拝にも支障が出ているようだ。現在文明牧師は憔悴しきった顔で信徒への対応に追われている。

正臣達はいつも通り、何も知らずに日曜の教会にやってきたのだが、人だかりやパトカーが止まっただけの大騒ぎになっているので、驚いて中を覗き込んでいる次第である。それでも警察の理解も得たうえで日曜の礼拝は行われた。午後になって、いつものように飛びかかってきた由良を肩車しながら、正臣は教会の中の様子を見て回っている。見分も終わったようで、午前中は立ち入り禁止になっていた一階のホールに入れるようになっていた。いつもは白い本にべったりの司も、流星に今日ばかりは白い本から離れて、何か怯えたような顔をしている。

あれだけ熱心に白い本に触っていたのに、今日は白い本に近づこうとすらしなない司の様子に、正臣は違和感を覚える。時と場合を弁えて遠慮している……というよりは、事件の原因が分かったうえで、その原因に怯えているように見えるのだ。

「今日のはあの本は、ほつたらかしていいのか？」

正臣が尋ねると、司は「うん……」と生返事をするのみだ。

「礼拝中も何かぼんやりしてたし、どうしたんだ」

祐介は今日も正臣にくつついて隣に立っている。二人の言葉を受けて、司はしばらく無言だったが、小さくため息をついて自嘲するように笑って見せる。

「ううん、私ってホント駄目だなんて。やっぱりジャング先生はすごいね。即断即決だったんだ。それに比べて私は、一年経ったのにあっちに行くのをまだ迷ってる」

「あっち？」

「ああ、いや。ううん、何でもないの」

司はそそくさと、兄達から離れて教会の外へと出ていってしまふ。

「どう思うよ、兄貴。アイツ、今確かにあっちっていったぜ」

「ジャング先生の行先を知ってるってことかな？」

「兄貴、俺、ちよつと司の事を尾けてみるわ」

祐介はそういうと、司を追いかけて教会の外へ出ていってしまった。一人になった正臣は、文明牧師の説明を聞いている、信徒の面々の顔を眺めてみる。

真っ青な表情をしているのは、トロ子と芽音の二人だ。白い本とやらに関係していた人間が二人そろってそんな顔をしているのを見れば、この騒動が確実にあの白い本に根差していることは容易に想像がつかってしまう。

意外なのは、テレサ・ティガールという少女は全く表情を変えていないことだった。

まるで当然、なるべくしてこうなったと言わんばかりの表情である。彼女は何か事情でも知っているのだろうか。正臣がじつと見ていると、テレサは視線に気づいたのか、横

目で正臣の方を見つめ返してくる。

けれどもすぐに視線を外して踵を返し、どこかへと歩いていってしまった。正臣は思わず手を伸ばして、テレサの後を追いかける。

「おい、待てよ！」

強めに声をかけると、案外あっさりとテレサは立ち止まって正臣の方を振り返る。

「外で話しましょうか」

そして、正臣の顔をもう一度見つめて、外の公園に目配せした。

○

正臣は、またシーソーに座っていた。教会の前の公園で、置かれているシーソーにまたがっている。対面に乗っているのは弟ではなく、金髪碧眼の美少女だ。

顎に届く程度の長さの髪に、透き通るような不思議な目。そんな外人の少女が真顔でシーソーに乗っている。その光景には何とも言えない違和感を覚える。

「ジャング先生は向こうへ行った。意外と決断が早かった」

さすが元宣教師、などとテレサが話を始めると、正臣は眉を顰める。

「司の奴も言ってたが、向こうとか、あっちとか、なんの話をしている？」

「知りたい？ 知りたいなら正臣も白い本に触ってみればいい」

司と違い、テレサは案外あっさりと言問に答えた。その表情に迷いはない。

「あの白い本つてのは一体何なんだ。神様に逢えるとか、人が失踪するとか、尋常じゃないぞ。良いのかよ、天下の教会であんなオカルトグッズが我が物顔でさ」

「二つとも間違つてない、正臣の言っている事は正しい」

神様に逢える、人が失踪する、その二つを差して正臣は正しいとはつきり言い放ち、テレサはシーソーをゆっくりと蹴り上げて浮き上がる。こちらを呼び捨てにするのは外国の習慣だろうか。英語の教科書を思い出すが、この際こっちの呼び方などどうでもよい。

「でも、一つだけ誤解している。あの白い本はオカルトグッズではない。正真正銘、ただの白紙の日記帳」

「いやいやいやいや、ただの日記帳に触つて人が失踪するものかよ！」

テレサの言葉に、からかわれているかの様に感じて、正臣は声を荒げる。

「別にからかつている訳じゃない。単純に、純粹に、あの白い本は依り代として選ばれているだけ。別になんでもいいの。十字架飾りでも、燭台でも、由良が抱いてるガーノスケでも、それは問題ない」

ガーノスケというのは、一階に置いてある巨大なアヒルのおもちやだ。子供たちに愛されているマスコットであり、「ガー・ガーノスケ」という素晴らしい名前がつけられている。ガコン、と音が鳴つて、今度はシーソーがテレサの方に傾き、正臣が宙に浮く。

「依り代？ 選ばれた？」

「そう、主が必要とされている。その呼びかけを行うのに、あの本が使われているだけ」
「もう少し解りやすいように説明してくれないか？」

「もう十分に解りやすく説明している」

私の日本語は通じているはず、と、テレサは大きく息を吐き出す。

「そんなに慌てなくても、正臣、それと祐介も、ちゃんと選ばれている。みんな順番にあっち側へ行くはず。トロ子も、芽音も」

「あっちってどこだよ。何の事を言っているんだよ」

「……形容しがたい」

真面目に質問に答えているのは雰囲気伝わってくるが、要領を得ない返答に、まったく知りたい答えを知ることができない。もう一度宙に上がったところで、テレサはシューを降りた。とん、と地面に着地して横目で正臣を見つめる。

「別に恐れることも、怖がることもない。時が来れば貴方もあの白い本に触ることになる。エリは貴方を選んでいる。私は多分先に行って待っていることになる」

だから……とテレサは正臣に近づいて。そつと頭に手を置く。

「明日の事で思い悩まないで良い。今日の苦勞は、今日一日だけで充分」

それが言いたかった、と言わんばかりに、テレサは得意げにふんす、と息を吐き出して見せる。流行っているのだろうか？

待てよ、という制止も受けずに、そのままテレサは教会の方へ歩いて行ってしまふ。

「選ばれてるって、俺も失踪するのかわ？」

テレサの言葉を思い起こした正臣の顔は、怖ろしさで蒼白となっていた。

○

法月司が失踪したのはそれから一か月後のことだった。

正確には、法月司「達」が失踪したのはそれから一か月後の事である。まず始めに荒木芽音が失踪した。どこかの財閥のお嬢様だったようで、その捜索はジャング夫人よりも大規模なものになった。

勿論、教会中で大騒ぎになり、皆で心当たりを調べて回った。その中で、今度はトロ子こと聖も失踪し、次に司が、最後にテレサが居なくなつたのである。

集団失踪事件として、ニュースにも取り上げられ、マスコミが連日この教会に殺到した。重要参考人として文明牧師は警察へ出頭することになったが、誘拐事件の容疑者とはならず、すぐに戻ってきた。通信記録などでアリバイが証明されたい。

最初は集団で家出でもしたのかと思われたが、全員が全員、手荷物も持たずに居なくなっている。ジャング夫人と同じような失踪の状況に、警察は事件性があると判断したようだった。

全国に顔写真が報道され、大規模な検問も行われたが、成果はえられず、一か月以上経っても目撃者一人得られない状況である。

白昼に起こった失踪事件は、やがて神隠しと噂されるようになり、しかも教会で起こった神隠しとしてネット掲示板でも話題になった。集団失踪、教会、白昼堂々、財閥令嬢 etc.。噂の火消しを行うには、あまりにも話題性がありすぎた。この事件は最早全国区のトップニュースになっている。

当然正臣も、祐介も顔色を変えて街の中を探し回った。

他の少女たちの神隠しはともかく、司は別種の失踪なのではないかと疑ったからである。失踪と見かけて、どうせまた廃墟巡りに出かけただけではないかと。そう信じたかったのである。しかし、すぐにその考えは改めなければならなくなった。

司が家出をしたわけではないという根拠は二つある。一つ目は身の回りの荷物が一切なくなっていないことだ。司は過去にも失踪したことがあるが、その時は様々な手回り品を持って計画的に「家出」していた。

それに比べて、今回は携帯や財布すらもその場に置き捨てて失踪している。これは正直、まったくありえない話だ。

二つ目の根拠は、時期を選んでいないことである。中学三年生の間試験を前にして、自分の意思で急に失踪することは常識的にあり得ない。

司は目的のためならば手段を選ばないが、決して馬鹿ではない。前回の失踪はちゃん

と夏休みの最中の事であったし、学業には支障がないように計算したうえで行われていた。ところが、今回はそういう様子もなく、そして司の友達に交友関係を当たってもらっても全く足跡がつかめない。勉学にも、友人関係にもトラブルはない。すべてを投げ出して失踪した、として扱うには動機が薄すぎるのだ。

「お役に立てずに申し訳ありません」

それから一週間は、正臣も祐介も、そして両親も碌に寝ずに、方々を探し回った。

当然のように全力で協力してくれる文明牧師は、正臣や家族の顔を見るたびに、本当に申し訳なさそうに頭を下げてくる。

奥さんだけでなく、教会の青年まで誘拐されるのを見咎められなかったという自責の念があるのだろう。しかし、牧師とて人間だ。彼が見張っていれば、少女たちは失踪しないで済んだのだと責任転嫁するのは、あまりにも理不尽である。

まあ、連日のテレビ報道では、民放も国営放送も面白おかしく文明牧師を犯人扱いにして報道しているの、自分を責めてしまうのも仕方のないことなのであるが。

過失があるわけでもないのに、文明牧師は本当に何度も何度も謝罪してはピラ配りを手伝ってくれる。会う度に正臣は逆に申し訳なくなるほどだ。

文明牧師だけでなく、教会の人々も実に献身的に捜査に協力してくれたが、司は勿論、ジャング牧師夫人や聖、芽音、テレサ達の手がかりも見つからないまま数カ月の時間が流れた。その数か月後、教会の中を走り回っていた由良まで失踪した。

忘れかけていた頃にまた事件が起こり、世間は奇異の眼で教会を見つめている。連日のいたずら電話に悩まされて、最早教会は滅茶苦茶になり果てていた。

それでも、毎週礼拝は守るのだから正臣は正直感心した。これが信仰というものなのだろうか。未だによくわからないが。

そんな由良の失踪も忘れられかけた、晩秋も過ぎ去た十二月の末。

年始を控えた法月家の食卓の会話から、ついに司の話題が消えた。警察もはやあきらめムードで、捜査員の数は大幅に減らされるそうだ。継続して四人の刑事が担当に当たってくれるとはいうが、警察経由での発見は絶望的にも思える。あとは自分たちで何とかするしかない、両親達は励まし合いながら、毎日駅前立って、自作のビラを配り続けている。

妹一人消えただけで、家の中は滅茶苦茶だ。父は無理に会社を休み続けて解雇寸前だし、母親の精神状態も大分まずいことになっている。正臣は、この年になって、初めて隠れて泣いている父親を見ることになる。さすがにいたたまれなくなつて、その日は家を飛び出して漫画喫茶で一夜を明かした。

弟の祐介も、司の失踪からこっち、めっきりしゃべらなくなつた。

常に険しい顔をして「あれでもない、これでもない」と独り言を言い続けており、暇さえあれば教会に出かけている。

「もしかしたらあの牧師や、教会の誰かが行方を隠しているかもしれない」

そんなことを言つて祐介は教会の中に潜り込むことに専念しているのだ。祐介は報道に影響されて、教会の内部犯行、特に文明牧師の関与を疑っているのである。

冷静で公平な物の見方をするはずだった弟が、今や偏見でしか物を見れなくなっている。その事実には正臣は驚いていた。人は追い詰められるところも変わるのだ。祐介も、冷静ではいられないのだろう。

情報収集の為に、祐介は毎週熱心に礼拝へ出かけ、信用を勝ち取り、教会内で人間関係を構築しているが、勿論成果は得られない。正臣にはその努力が徒労に思えてならなかった。

教会の内部に司の失踪に関わっている人が居るとはどうしても思えない。もしその痕跡が欠片でもあれば、文明牧師は決して警察署から出てこれないはずだからである。勿論何度も任意同行で連行されたが、数日たたずに文明牧師は帰ってくる。

これ以上ないぐらいに身辺、素行、アリバイ含め真つ白だからだそうだが、牧師も教会の人々も何も知らないのだろうという確信が、正臣にはある。

もっとも、その確信は文明牧師の潔白故ではない。以前、失踪する前のテレサとの、あのシーソーの上での会話が未だに頭の中に残っているからだ。

貴方もいざれ白い本に触ることになる。そして向こう側へ行くだろう。そうテレサは正臣に言い放ったのである。向こう側とは何か、結局わからず終いであったが、しかし、もし司達が失踪したというのならば、その「向こう側」にいるに違いないのだ。

しかし、そんなことを言い出したところで何になるのだろうか。気が触れたと言われて病院に入院させられるのがオチだ。正臣は、祐介にすらあの時の会話のことを言い出せずに苦悩していた。あの白い本に触ることで何らかの解決が得られるのではないか。そう考えもしたが、それを行うのはためらわれた。

恐ろしいのだ。自分もまた、司や他の少女たちの様に失踪することが。

できれば、オカルトなど関係ない普通の誘拐事件、失踪事件であって欲しい。自分の予感や直感など実はとんだ見当違いで、今日にも警察から手がかりの連絡が入るのではないか。そんな逃避のような面持ちで毎日を過ごす内に、半年以上の時間が経過してしまったのである。

教会の人々は、今日も人事を尽くして司を探してくれている。暇を見つけては交代でピラを配ってくれている。ありがたい話だ。

だが、それでは司は永遠に見つからない。正臣にはその確信がある。

最早状況は最悪だ。誰も口に出さないが、妹の生存は既に絶望的であるかのように思われている。だから、家族の中でも司のことを話題に出す人間はいない。

しかし、それで良いのではないかと考え始めている自分が居ることに、正臣は驚きを隠せないでいる。誰も気づかないだけで、実は行方不明になった当日には、司はもう死んでいるのではないか。行方が分からないだけで、今もこの町のどこかで妹の屍体は眠っているのではないか。わからないが、それでいいではないか。

根本的な解決方法を知っているにも関わらず、それを実行できないで自分をごまかそうとしている。そんな卑怯な自分に、正臣は嫌気がさしていた。

あの白い本に触れば、何か解決の手口がつかめるかもしれない。しかし、それは自分の失踪という恐ろしい事態と引き換えにだ。

そんなことをつらつらと考えながら、今日も正臣は大学からの帰り道、足早に電車から駅のホームへと降り、改札口へと向かった。改札口の外で両親がビラを配っているからだ。

案の定、両親は今日も変わらず妹のビラを配っている。

さて、俺も手伝うかと、正臣は漫然と両親のもとへ向かおうとしたところで、誰かに急に肩をつかまれるのを感じた。驚いて振り返るとそこには祐介が立っている。

「兄貴」

「驚かすなよ、なんだよ、随分座った眼してるじゃないか。寝てないのか？」

血走った目で、祐介は正臣を凝視していた。実際寝ていないのだろう、その表情は蒼白で、死人のようである。

祐介は普段は持ち歩かない大き目のリュックサックを背負っており、そのリュックを下ろして腕に抱えなおした。そんな姿に正臣は目を見張って声をあげる。

「どうしたんだよそのリュック」

祐介は、その問いかけに、無言で勢いよくリュックを開いて、その中身を見せた。そ

ここには、見覚えのある革の装丁に包まれた本が入っている。あの「白い本」だった。

「……いやいやいやいや、お前何してんの？ 窃盗だぞ、それ」

しばらく絶句したあと、正臣は祐介をみつめる。祐介はそんな正臣の反応など無視するかのようにはしゃべり始める。

「悪いがこつそり拝借してきた。確信したよ。やっぱり、アレは、司は、この本の中にいる。どこかに行つたわけじゃない。この中に居るんだ」

その言葉に、正臣は絶句した。祐介も、正臣がテレサから教えられた答えに行きついたので。司も、他の少女達も皆、この本をきっかけに失踪している。そして、その謎を知りたければこの本を触るしかないことに気づいたのである。

そして、祐介は正臣と違い、それをためらいなく実行したのだ。

「いやいや、落ち着けて。お前自分が何言ってるか、わかつてるのか？」

正臣は弟よりまず自分を落ち着かせようと、間を置くことに専念した。祐介は目をまんなまるにするが、我に返つたように頭を左右に振つて続ける。

「悪い。兄貴。何言ってるのかわからないよな。でも上手い説明の方法が分からないんだ。でも俺の言ってることは本当なんだ。信じてくれ。この本はヤバイ。多分、かなり、きつとヤバイんだよ」

祐介はリュックを背負いなおすと、正臣の両肩を掴み、そして顔をじつと見つめて今までにない真剣な表情で声をあげる。

「とにかく聞いてくれ兄貴。俺は神なんて信じないが、確かにこの本はそれらしい何かにつながっている。俺はこれからそいつ経由で司を連れ戻しに行く。でも、多分戻ってこれないとおもう。俺は兄貴みたいに失敗に強くないからな。だから……俺が戻ってこれなかったら、頼む兄貴、今度は兄貴がこの本に触ってくれよ」

「お前、何言つて——」

「兄貴。俺は兄貴の事、尊敬してるんだぜ。兄貴は俺の事を凄いとか思ってるかもしれないが、俺から言わせれば兄貴のほうが凄いんだ。兄貴が失敗してもめげずに自分のやりたいことをやってくれるから、俺はそこからうまいやり方を見つけられたんだ。俺は、うまくやれるかもしれないけど、失敗から正解を学び取るのは苦手だ。俺は兄貴みたいには出来ない。だから——」

「祐介、落ち着け！ その本は駄目だ、それ以上その本に関わるな！」

正臣は取り返しのつかないことが起こっていることを悟った。慌てて祐介の声を遮って叫ぶ。その声に周りの人々が立ち止まってこちらを凝視するが、祐介はその周りの様子など意にも介さずに、正臣の腕を両手でつかむ。

「良いから聞け、兄貴。俺は多分失敗する。兄貴も多分失敗する。でも兄貴は失敗しても絶対に立ち上がる。だから成功できるのは兄貴だけなんだ。今までもそうだった。だからこれからもきつとそうだろう。だから、多分、エリの奴も最後は兄貴を切り札にするはずだ。後は頼んだぜ、兄貴」

それだけ言うと祐介は後ろを向いて走り出していった。方向は自宅の方角である。

正臣は、このまま祐介を見送ると、本当に二度と会えなくなるような気がした。だから慌てて走り出し、その後姿を追いかける。しかし弟の俊足に、正臣は追いつくことができなかった。

その日を境に、祐介も家族の前から失踪することになる。祐介の部屋の机の上には、祐介のカバンの中に確かに入っていた、あの白い本が当たり前のように置かれていた。

○

祐介の失踪から一カ月が過ぎた。娘どころか息子までいなくなり、父と母は半ば放心して毎日を過ごしている。もはや誰も家の中でしゃべらない。

死んだように眠り、幽霊のように起き、妹と弟のピラを配りに方々に出かけていく。祐介の失踪は教会とは関連が無いものとして扱われ、報道の対象にはならなかった。世間は失踪事件に飽きていた。もはやインターネットでも風化している。

父親は仕事にも出かけていない。母親は食事も作れない。ピラを配る以外に動くことがない。

そんな中、正気を保っているのは正臣のみだった。正臣が正気を保っている理由は、弟と妹の失踪の原因が、あの白い本であることを知っているからである。

俺が帰ってこなかったら、次は兄貴が白い本に触ってくれと、祐介はそういつて後のことを正臣に託した。しかし、正臣は白い本に触るのを未だにためらっている。

怖いのだ。

白い本が祐介の机の上に置かれていることを、正臣以外の誰も知らない。厳密には、見ても意味のない本が置かれているだけだと誰も気に留めないのである。

警察の鑑識も一通り弟の部屋を調べ、白い本についても質問されたが、正臣は未使用の日記帳だと嘘をついた。押収されても困るからである。

文明牧師はあれからすっかり老け込んでしまった。最初出会ったときは、見た目もまだ三十代半ば程度だったが、この所の姿は、最早壮年後期の様に白髪だらけである。何度か会うこともあったが、白い本が家にあることを言い出せないでいる。本を返したら、弟を助け出せないという予感があったからだ。

だからと言って、白い本と面と向かい合えるような勇氣は正臣にはない。あれに触るとどこへ行くのか、予想もつかないのだ。

あれから、妹のパソコンをつけて、その内容を調べてみた。妹には悪いと思ったが、日記も開いてもせてもらった。

しかし、日記を開いても、白い本については何も書かれていなかった。今日はエリちゃんと何これ話を話した。今日はエリちゃんにこういったことを教わった、と謎の「エリ」の名前が無数に書かれている。

こいつは一体誰なんだ。正臣はこの名前を見るたびに震えが止まらない。

弟の祐介も、エリという名前を口走っていた。

警察も、この「エリちゃん」が事件に関わっているものとみて調べていたが、妹の行動記録から、エリという名前に該当しそうな人物を探り当てることはできなかった。

脳内の友達か、それともインターネット経由のハンドルネームか、一時期は光明にも思えたその手がかりも、結局空振りに終わったのである。

司と、祐介を助け出すためには、最早白い本に触れるしかない段階まで、正臣は追い込まれていた。このまま、弟と妹の失踪を見て見ぬふりをして過ぐすか、それとも腹をくくって白い本に触れるかの二択を迫られている。

今から思い出せば、司の様子も、祐介の様子も尋常ではなかった。まるで、これからしばらく後に、自分が失踪することを知っていたような振る舞いさえあったように思える。

いや、祐介に至っては、明らかにそれを予期して行動していた。祐介は自分がおそらく失踪するだろうことを正臣に告げに来たのだ。自分が消えた後のことを兄に託す為に、わざわざ会いに来たのである。

だからこそ恐ろしかったのだ。あの本が「本物」であることを認めない訳にはいかなからである。

正直、オカルトや怖い話が苦手な正臣は、家の中に得体のしれない白い本があるだけ

で、そのストレスに耐え切れないでいる。

できればすぐにでも庭に持ち出して燃やしてしまいたい。

どうして司はあんな恐ろしい本に興味をもったのか。どうして祐介は教会にこだわって、あの白い本に触り続けてしまったのか。正臣は意味のない責任転嫁を弟と妹に対して繰り返している。恐ろしくて、怖ろしくて堪らないのだ。

しかし、それでは弟と妹は帰ってこない。

——別に恐れることも、怖がることもない。時が来れば貴方もあの白い本に触ることになる。エリは貴方を選んでいる。

胸中に、シーソーの上で語られたテレサの声が反響する。

自分は果たして触るのか、あの本に。これまで、逃げて、逃げて、逃げ通してきた自分があの本に立ち向かえるというのだろうか。

——私は、正臣の側にいる時が一番幸せだよ。明日も来てね。正臣。

誰かの声が胸の中に響いたのを聞いて、正臣は無言で進む食卓の中で、突然勢いよく立ち上がった。それまで死んだ魚のような目で食事をしていた両親が驚いて顔をあげる。

「父さん、母さん、俺、二人の居場所に心当たりがあるんだ」

「なんですって！ どこなそこは！？」

その言葉に母親が顔色を変えて食いついてくる。久しぶりに、目の中に光が灯つたのを見た気がした。その光は、もしかしたら狂気の光かもしれないが。

「教えられない。けれど、俺が一人で探しに行く。危ないところなんだ。けれど、俺が絶対に二人とも連れて帰ってくる。約束する。だから、もし俺がしばらく見当たらなくなっても、ピラを配るのはやめて、信じて待っていて欲しいんだ」

「正臣、貴方を言っているの？」

母親の顔は困惑に包まれている。一か月前には自分もこんな顔をしていたのだろう。祐介の表情や反応が、今は手に取るようにわかる。あの祐介の顔は、どういったらこちらが理解できるか、必死に言葉を選んでいた顔だったのだ。祐介はこんな気持ちだったのだな、と、正臣は唇を噛む。

「意味が分からないかもしれないけれど、でも本当なんだ。だから、俺の為にピラを配るのはやめてくれ。父さんは会社にいつてくれ、母さんはいつも通り家事をおこなってくれ。もう死んだような顔でピラを配るのはやめてくれ。二人を連れて帰ってきたときに、こんな状態じゃみんな気が滅入るだろ」

「……信頼していいんだな？」

正臣の言葉とその気迫に、それまで無言で聞いていた父親が顔をあげる。

正臣が力強く頷くと、父親はわかった、と声をあげた。それまでの死んだような目ではなく、生気の灯った瞳をしている。

これはチャンスだと正臣は思った。法月一家が、正気でいつもの日常を取り戻すためには、この時を置いて他にない。もう退路はない。恐怖はあるが、正臣はこれ以上家族が壊れていく様子を見たくなかったし、何より逃げたことで後悔するのを、これで終わりにしたかったのである。

正臣はリビングを飛び出すと階上を見上げる。やってやる。そう意気込んで一段一段階段を踏みしめていく。階段を登り切れば、まずは司の部屋を、そして白い本のある祐介の部屋を覗みつけ、そのドアをひねって飛び込んだ。

祐介の机の上には、当たり前のように白い本が置かれている。正臣は白い本の前に立つと、それに手を伸ばし、その拍子に手を置いた。

「逃げるのはもうやめだ。やってやろうじゃないか。勝負だ。来いよ、白い本」
最後は兄貴が頼りになる。頼んだぜ、兄貴と、祐介の声が胸の内に反響される。

自慢の弟に託されたのだ、ここで引き下がったら兄貴ではない。正臣は手を伸ばして、勢いよく白い本を開くのだった。